教育の質の点検・評価のための学外の参画に関する報告書（2023 年度版）

2024 年 3 月 22 日
副学長（質保証担当）佐藤　淳

１．北海学園大学の教育活動・学生支援に関するアンケート調査

（１）調査概要
１）対象：民間企業・団体・自治体・官公庁 386 社にキャリア支援センターから依頼
２）調査期間：2023 年 12 月 1 日～12 月 25 日
３）調査内容：
①学生および卒業生について、②採用について、③インターンシップについて
④本学の教育について、⑤本学の取組について
４）回答数：102 件（回答率 26.4%）

（２）調査結果：2023 年度　アンケート調査結果＜別紙のとおり＞

２．企業・自治体との意見交換

（１）面談日
（民間企業）2024 年 2 月 27 日（2 社）、3 月 1 日（1 社）
（自治体）2024 年 2 月 29 日（1 団体）
（２）意見交換先
民間企業 3 社：人事担当者
自治体 1 団体：総務・人事／DX 担当者
（３）意見交換の内容
①入学者選抜・建学の精神、②卒業生の状況、③本学への期待
④カリキュラム・教育方法、
（４）意見交換における特記事項
①入学者選抜・建学の精神について
各学部で定めた入学者受入方針（AP）を示し入学者選抜を通して入学した学生に対しては、本学の建学の精神「開拓者精神」の学生の自立と自律をめざした特色あるカリキュラムによる教育を行っている、またスクール・モットーとして「未来を切り拓くパイオニア」を育てようとしていることを紹介した。これに対して、「開拓者精神」の考えはさらに推進すべきであり、それを誇りにすべきであるとのご意見をいただいた。すなわち、「常に新しいことにチャレンジする精神を持ち、失敗を恐れない姿勢が大事である。失敗を恐れて何もしないことより、失敗を如何にクリアしたかの積み重ねが大事である。失敗の無い人（チャレンジをしない人）は、出来ることしか仕事をしない守りの傾向にあり、成長が止まってしまう。学生時代には様々な挫折や失敗

を経験して、それらを乗り越える力を身に着けられるような人材育成を期待したい。」とのお言葉をいただいた。この言葉を受け、本学は引き続きこの建学の精神を堅持し、今後も誇りをもって大学教育にあたって参りたいと考える。

②卒業生の状況について

先の建学の精神に基づき、本学の卒業生が 1）解決すべき課題を自ら見いだせているか、2）受け身ではなく能動的に動けているか、の 2 点を中心に就業時の様子について伺った。これに対しては、「これまで採用した卒業生は自分で動いて課題を見つけ解決することができる能力があり、業務に必要なスキルも身に付けている。会社として頼もしい人材である」、「本学の卒業生は、他大学に比べてコミュニケーション能力が高く、お客様との対応は大変助かっている。社内で見ても目立つ存在であり、入社前に資格を取得するなどの姿勢もみられ意欲が高い」、「責任感が強く与えられた仕事に対する姿勢はとても良いものがある」、「どの卒業生の方もフレンドリーな性格であり営業職としてとても向いていると感じている（コミュニケーション能力が高い）」といった肯定的なご意見をいただいた。しかし一方で、「不足していると思う点は、若い方の傾向として自分からリーダーシップを発揮する方が少ないなど、受け身の学生が多いのが現状」、「やはりおとなしく受け身のスタンスである。もっと自分から声を発して困った際には周りに頼ってほしい」との声も聞かれた。このことから、今後は先の 2 点目に重点を置き、能動性を高めることを念頭に働きかけて参りたいと考える。

③本学への期待について

今後有為な人材を確保、育成するにあたって、大学教育に望むことを伺った。「新しいスキルや知識を業務に取り込む柔軟な対応が可能な方を期待している。年齢に関係なく時代の流れに合わせられることが大事」、「学生同士が一緒に学修したり物事をやり遂げたり、周りの学生を巻き込み協力したりする経験が大事だと感じている。ゼミ生同士の活動だけに留まらず、学外のコミュニティ等への参加も重要だろう」、「（大学で教えることではないかもしれないが）基本として挨拶が重要。コミュニケーションを図る最も簡単で効果的な方法なので、入職時までには理解しておいて欲しい」といったご意見をいただいた。すなわち、創造性や柔軟性、協働性を身に付けることが重要であり、何より基本として「人が好き」で「人から好かれる」人が求められていると感じた。このような点は、各学部の DP で汎用的能力としてすでに位置づけられていることでもあるため、今後も PBL 等の協働的な授業を増やして参りたいと考える。

④カリキュラム・教育方法について

今年度は本学において「数理データサイエンス教育プログラム」を開始させた年で

もあったため、プログラムの内容を示したうえで、このようなカリキュラムの必要性や重要性について伺った。「データサイエンスについてある程度の知識や理解がある学生を求めたい。業務の効率化をどのように進めるかといった課題にも取り組める学生が必要になる」、「このプログラムは就活のアピールポイントとして効果があるだろう」、「採用担当として考えると、その履修者は自社に限らず引く手あまたではないかと感じる」、「最低限の情報リテラシー能力を持っていることは必要であり、採用側としては重要と考えている。プログラムを組むなどの専門的知識が無くても、ロジカルに考えられることが大事」、「現場においては統計学が大事であり、ロジカルシンキングが出来る人材が必要。こういったスキルがあるととても有益なので、採用時には武器になるだろう」といった肯定的、積極的なご意見を頂戴した。このことから本プログラムの必要性と重要性、そして意義についても確認できたため、次年度以降も力強く推進して参りたいと考える。